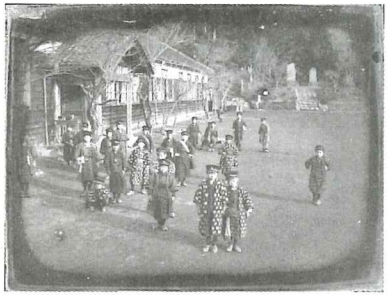
郷土館発
映像の記・録

奥三河郷土館には様々な資料があり、それぞれの資料から、『その時』を生きた人たちの生活をうかがい知ることができます。多くの資料の中に、当時の人々の姿や生活を撮影したものがあります。今回紹介するのは、『ガラス乾板ネガ』です。

昔は、写真撮影にはフィルムが必要でした。そのフィルムが出現する前に使われていたのが、ガラス乾板です。奥三河郷土館には、寄贈された二百枚以上のガラス乾板ネガがあります。撮影されているのは、記念写真的なものがほとんどなのですが、子どもや風景を撮影したネガもあります。撮影された時期や場所・人物等を特定できないものがほとんどです。しかし、今回幸運なことに、並行して行っていた資料整理の中の古いアルバムのコピーから、貴重な情報を得ることができた写真が数枚ありました。写真の横には、「大正〇〇年〇〇にて」「昭和〇〇年〇〇」というようなメモがあり、それを見つけた時には、本当にうれしく思えました。メモが無い写真もありましたが、ガラス乾板ネガから写真にしたものと比べたりしながら、おおよその年代や場所を推測することができるものもありました。

一致した写真の数枚をご紹介します。

これらの写真は、大正八年頃の自然体の子どもの様子を撮った写真（スナップ写真）です。

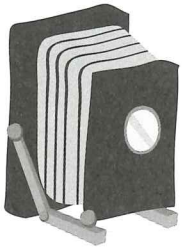


大正八年　稲橋小学校

大正八年　稲橋堰堤下

大正八年　名倉川畔

この当時（大正八年頃）の『写真撮影』といったら一大行事で、お金も手間もかかることであるとともに、撮影の機会などめったにないと考えられます。そのような時に、生き生きとした子どもの姿を撮影していることが私にとって驚きでした。その驚きをもって写真を見ていくと、自然にその写真が映し出している『時』の中に吸い込まれてしまいます。

これらのガラス乾板写真を撮影された方が、どういう人でどんな意図を持って撮影されたのかは、分かりません。しかし、一枚の写真の中に、その当時を映像として残そうとするだけでなく、伝えようとする強い気持ちがあるように思えてなりません。このような写真を見る現代の私たちは、先人の思いを感じ、自分が『今』を残そうとシャッターを押す時には、少しの『思い』を込めるといいのかもしれません。映像が簡単に扱える現代だからこそ、ガラス乾板写真を通していろいろな事を考えることができます。

（奥三河郷土館長　渡邉俊也）